日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇二五年（令和七年）四月三〇日
第一號（通巻第四七號）

八大山人「安晩帖」石図（泉屋博古館蔵）

❖目録

巻頭言
二　退任にあたって　大木　康
四　国際学術交流私的回顧—山井湧先生と張建業先生を偲ぶ　佐藤錬太郎
六　明末清初期における參禪悟道とその資料　野口　善敬
八　中国若手学者の日本中国学会参加体験談　李　曌宇
一〇　国内学会消息（令和六年）
二一　二〇二五－二六年度　各種委員会委員の構成
二二　各種委員会報告　研究推進・国際交流委員会
二三　事務局より
二四　第77回大会開催のお知らせと研究発表の募集

編集◉京都大学人文科学研究所　古勝　隆一
〒606－8501　京都市左京区吉田本町
メールアドレス：gakkaidayorikyoto@gmail.com
発行◉日本中國學會
〒113－0034　東京都文京区湯島1－4－25　斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：https://nippon-chugoku-gakkai.org/

退任にあたって

前理事長
大木　康

二期四年間にわたって、理事長をつとめさせていただいた。四年の間に本学会のためどれだけの貢献ができたのだろうかと考えてみると、はなはだ心もとないものがあるが、とにもかくにも前任の金文京先生から引き継いだバトンを後任の小島毅先生にお渡しすることができ、まずはホッとしているところである。

いま退任にあたっての一文を草せんとするに及び、思い浮ぶのは、感謝の言葉ばかりである。二期にわたり副理事長をお願いした吾妻重二先生、浅見洋二先生には、事あるごとに相談に乗っていただき、時には背中を押していただいた。頼りない理事長であったばかりに、どれだけ頻繁にメールでのおたずね、あるいはオンラインでの会議をお願いしたかわからない。

また、二期四年の間に理事をお引き受けいただき、各種委員会の委員長、副委員長の仕事をお願いしたみなさま、また各種委員会の委員をお引き受けくださったみなさまにも、心からの御礼を申し上げたい。日本中国学会の活動の大きな柱は、学会誌『日本中國學會報』の刊行と毎年行われる大会の二つであるが、本会の活動は、実質的には各種委員会の先生方によって進められているといってよい。『學會報』について、まず論文を投稿してくださった会員のみなさま、そして厳正な審査を行っていただいた論文審査委員会の委員長、副委員長、委員、幹事、そして査読にあたっていただいた先生方、さらには実際の編集作業を行ってくださった出版委員会の委員長、副委員長、委員各位、とりわけ編集担当校の先生方に、御礼を申し上げたい。昨年刊行の第七十六集の刊行にあたっては、従来印刷をお願いしていた印刷会社に代わって、急遽別の会社に印刷をお願いせざるを得なくなった。この危機の中で、何とか昨年中に印刷を完了し、会員のみなさまに『學會報』をお届けすることができた。出版委員会の先生方には、年に二回の「便り」の編纂刊行、学界展望の作成作業にもご尽力いただき、昨年からは学界展望中国語訳 pdf をホームページに公開することもできた。

もう一つの柱である大会についても、大会委員会の委員長、副委員長、委員各位、そして大会開催校のみなさまのおかげで、無事大会を開催することができた。就任一年目の2021年は、いまだコロナ禍の最中であったが、愛知大学のみなさまのおかげで、オンラインによって大会を開催をすることができた。ようやくコロナの明けた2022年には、早稲田大学において、会場とオンラインを併用する方法での初めての大会を開催できた。その後、2023年の大阪大学、2024年の二松学舎大学での大会は完全に対面によって開催された。大阪大学の大会で、しばらくぶりに懇親会を復活できたことも思い出深い。二松学舎の大会でも、特別講演会を広く一般にも視聴できるよう公開したことが新しい試みとして行われている。

大会においては、研究推進・国際交流委員会の発案と実際のお世話によって、これまであった次世代シンポジウムに加えて、若手の会員が出版した書物を取り上げ、さまざまな方向から検討を行う書評シンポジウムをはじめられたことも、特筆に値しよう。これまで三度の大会において行われた書評シンポジウムは、どの会場にも多くの参加者がつめかけ、熱気につつまれていた。

サーバーの管理にはじまり、大会の連絡をはじめとす

るさまざまな情報をホームページに掲載し、また『學會報』論文の pdf 掲載などをご担当いただいた広報委員会の委員長、副委員長、各委員、そして実際不時にあらわれる情報に対応していただいた幹事のみなさまにも御礼を申し述べたい。

一年おきに実施される評議員および理事長選挙を厳正に遂行していただいた選挙管理委員会の委員長、副委員長、委員、幹事のみなさまにも、この場で御礼を申し上げたい。2022年に行われた評議員、理事長選挙において、はじめて電子投票による選挙を行うことができた。この間、選挙管理委員会の先生方には、電子投票を行う業者の選定をはじめ、多大なご苦労をいただいた。おかげで電子投票による選挙も軌道に乗り、選挙の投票率を紙による投票のころと比べて、各段に上げることができた。

将来計画特別委員会の委員長、副委員長、委員のみなさまには、第一期において、会員が減少している現在の状況に対して、日本中国学会をより魅力あるものにするためにどうしたらよいだろうかとの諮問に答え、その具体案をお示しいただいた。この案に沿って、まずは会員論著目録の作成公開を開始することができた。現在、試行版としてホームページに2022年と2023年の目録が公開されており、わたし個人としても、たいへん重宝している。また、デジタル化の時代に対応するために、デジタル化推進に特化した委員会の立ち上げをご提案いただき、吾妻重二副理事長を座長とする作業部会による検討結果をもとに、会則と委員会規約の改正を行い、2025年度からデジタル化推進委員会を立ち上げることができた。この新しい委員会が力を発揮し、本会がより魅力的な会となることを期待したい。

最後に、理事長を直接支えていただいた事務局の各位にも、心からの御礼を申し述べたい。何か対応しなければならない事が起こると、すぐに前例を調べてくれ、また粗忽なわたしが文書などを作ると、ミスを発見してくれるのが、事務局幹事の諸兄であった。幹事のみなさんは、それぞれに多忙な本務をかかえながら、一つ一つの事案に適切に対応してくださった。わたしのような凡愚のものが四年にわたって理事長をつとめられたのは、事務局のみなさんの助けあってのことである。

以上は、主として役員のみなさまに対する御礼であるが、在任中、加地伸行会員（顧問）より多額のご寄付を頂戴し、そのおかげで本会の会計に特別寄付金会計を設けることができ、日本中国学会賞の賞金積み増し、および若手会員が大会で発表する際の宿泊費補助をはじめることができた。この場を借りて、加地先生に改めて御礼を申し上げたい。

現在日本の中国学、また日本中国学会が置かれている状況を考えると、この四年の間にできたことはあまりに少ない。かつては二千名を超えていた会員も、いまや千五百名を割り込んでいる。幸い若いみなさんに入会していただいているおかげで、会員減少のペースはゆるやかになっているが、それでも会員減少に歯止めをかけるには至っていない。理事長をつとめていていちばんつらかったのが、毎回の理事会で出される資料の中で、退会申出会員、あるいは会費未納による退会者の名簿を見せられる時であった。定年退職とともに退会するのが一つの流れになっているのではと危惧するが、研究に定年はないので、もし退会をお考えの会員の方がおられたとしたら、ぜひともお考え直しいただければと切にお願いする次第である。

やらなくてはと思いながら、ついに実現できなかったのが、周年記念事業の立ち上げである。日本中国学会は2018年が70周年であった。1998年の50周年にあたっては、記念事業として『五十年史』と『記念論文集』が刊行されている。2048年の百周年では、いくらなんでも先のこと過ぎるであろう。80周年もしくは85周年を目指して、何らかの記念事業を計画してみてはどうだろう。

小島新理事長のもと、日本中国学会が大きく発展をとげられるものと信じている。これからも一会員として、『學會報』や大会を通じ、勉強を続けさせていただきたいと思っている。

国際学術交流私的回顧
―山井湧先生と張建業先生を偲ぶ

北海道大学名誉教授
佐藤錬太郎

2023年10月に恩師山井湧先生（1920-1990）の三十三回忌と奥様の一周忌、ご次男の三回忌を兼ねた山井家の法要に参列した。その前年にすでに、山井先生著『明清思想史の研究』（東京大学出版会、1980年12月刊）の中国語版、陳威晋訳『明清思想史研究』（山東人民出版社、2022年１月刊）が、武漢大学の欧陽禎人教授らが編纂した『日本陽明学研究名著訳叢』の一冊に加えられていたが、2024年暮れに東大出版会経由で山井家に中国語版が届くまで、私は迂闊にも刊行されていたことに気づかず、生前の奥様に報告できなかったことを残念に思っている。

台湾大学の畏友、鄭吉雄教授からの再三の要請に応えて、2009年に中国文系に出講した時に、台湾大中文系の陳威晋氏に翻訳を依頼し、私と北大院生の関雅泉さんが訳稿を点検して、2016年ごろ陳氏が入稿していたのである。山井先生は本書の中で、朱子学と陽明学を比較し、「心即理」「知行合一」「致良知」の意味について分かりやすく解説し、明清時代における「気の哲学」の系譜、明末清初の「経世致用の学」、黄宗羲と顧炎武、戴震の学問について論じておられる。山井先生の遺著の中国語版が刊行されたので、中国、台湾のみならず、日本でも留学生に一読を勧めたい。読者は裨益を受けるに違いない。

また、2024年10月４日に首都師範大学の張建業教授（1937-2024）が急逝されたという訃報が届いたのは同年暮れのことである。私は10月18日から24日まで国際儒学連合会主催の孔子生誕2575周年記念国際学術シンポジウムに参加して北京に滞在中であったのに、張先生のご逝去を知らず、弔問に行けなかったのは遺憾であった。張建業先生は、長年にわたって李贄研究を主導され、研究の発展に多大の貢献をされた。私は、2001年以来、ご厚誼、ご恩顧を賜った張先生のご冥福を祈るばかりである。

そこで、私自身の国際学術交流を回顧しつつ、生前の山井先生と張先生を偲びたいと思う。私が1978年に東大文学部中国哲学科に所属した時の指導教官が山井教授である。先生には古武士の温厚な風格があり、篤実な学風に敬服した。文学部と大学院の演習では懇切丁寧な指導をして頂いた。また、課外では、山井教授と大島晃先生（1946-2015）が主催する朱子学研究会の輪読会があり、訓読の訓練をして頂いた。1980年春に李贄『道古録』について卒論を提出し、査読に当たられた山井先生から、「丹念に資料を整理し、足場を固めて着実な研究をおこない、しかも従来の通説的なとらえ方とは違った独自の李卓吾像を描きあげたのは大変結構だ。将来も柔軟さと堅実さを失わずに研究を進めてもらいたい。」という講評を頂き、戸川芳郎先生からも褒めて頂いたことは、李贄研究を進める上で大きな励みとなった。同年、修士課程に進学して間もなく、山井教授を団長とする東大中国哲学訪中団に加わり、４月23日-５月６日の日程で、文革後の中国を初めて訪問した。北京では、北京大学哲学系の張岱年教授を表敬訪問した。洛陽、西安などの遺跡を参観し、江蘇省無錫では明末に顧憲成が再建した東林書院の遺跡を見学し、山井先生が、「天地正氣聚於此」と達筆に揮毫されたのを覚えている。その後、８月19日から９月８日まで、朱子学研究会のメンバーと共に真夏の台北で『朱子文集固有名詞索引』（東豊書店、1980年10月刊）の校正に従事した。その校正体験から人間はミスを無く

せないと自覚すると共に労苦を共にした大島助手との絆を深めた。1981年に山井先生は東大を定年退官され、大東文化大学文学部で学部長に就任されたが、東大ご退官後も、黄宗羲『明儒学案』や『万暦野獲編』の読書会で指導して頂いたのは有り難かった。1986年３月には山井教授を団長とする朱熹遺跡調査研究訪中団に加わり、上海、福建省武夷山、朱熹墓、考亭書院、福州、泉州、李贄故居、厦門大学、漳州、上海などの遺跡を参観した。残念なことに山井先生は厦門で心筋梗塞を発症され、健康を損なわれた。翌年３月、北大文学部助教授として札幌に赴任する前に山井先生のご自宅に伺った時には、とても喜んで頂いた。山井先生はよく「読書の種子」を残すのがご自分の使命だと言われていた。この言葉を肝に銘じて北大に赴任した。先生の古稀を祝うため、受業生13名が企画執筆した論文集（有田和夫・大島晃編『朱子学的思惟―中国における伝統と革新』汲古書院、1990年２月刊）をご覧になってから他界された。東大中哲在籍中の九年間、先生にご指導頂いた学恩は忘れ難い。

私が国際学術交流に関わるのは、1997年に九大の岡田武彦教授（1908-2004）が主催した国際陽明学京都会議に招待された時からである。その時は中国語による発表にも不慣れであったが、中国人留学生を受け入れるようになってから、講義や演習でも中国語で説明し、日常的に留学生と会話するうちに耳も慣れ、会話できるようになった。

2001年10月には張建業教授より李贄逝世400周年を記念する「李贄与雲南」全国学術シンポジウムに招待して頂き、北京の張建業先生のご自宅で康淑貞夫人の手料理で歓迎して頂いた。13日に首都師範大学の先生方と共に空路、昆明に向かい、15日に雲南民族学院中文系主催のシンポジウムに参加した。17日に姚安に移動し、18日に姚安の李贄遺跡（架橋、龍華寺等）を見学した。20日に一人で空路、武漢に戻り、麻城に向かい、21日に、李贄が晩年に居住した龍湖の遺跡を参観し、李贄関係の資料を収集した。22日に赤壁の古戦場を、23日に湖北省博物館、黄鶴楼を参観し、24日に北京に戻り、北京大の張学智教授と晩餐を共にした。翌2002年にも張建業先生より「李贄与麻城」国際学術シンポジウムに招待され、９月３日に張先生ご一家と晩餐を共にし、４日に空路、麻城に向かい、６日にシンポジウムに参加した。８日には麻城の道観を見学し、亀峰に登り、さらに天台山（湖北省黄安、現在の紅安）に登り、耿定向の天台書院遺跡を見学した。９日に揮毫を請われ、旅の恥は云々と思い、拙い簡体字で「李贄麻城獅子吼、侠骨猶香四百年」と揮毫したところ、張先生主編の『「李贄与麻城」国際学術研討会文集』（中国広播電子出版社、2003年12月刊）に掲載されてしまった。それ以来、揮毫は固持したが、2019年11月に張先生から寄贈された『李贄評伝』（張建業李贄研究叢書第一冊、首都師範大学出版社、2018年12月刊）にも再録されていたので、ご高配に汗顔の至りである。2004年12月には泉州市李贄学術シンポジウムにお招きいただき、晋江の李贄故居や開元寺、清真寺を参観した。2004年９月に張建業先生ご夫妻が札幌に来訪され、積丹半島や支笏湖温泉にお供したのは懐かしい思い出である。張先生から、何度も招待して頂いただけでなく、著書も編纂書も殆どすべて寄贈して頂いた。学恩は計り知れない。

2004年５月には、北海道大学と交流協定を締結した北京大学哲学系の90周年記念祝賀式典に招待され、胡軍教授（1951-2022）に円明園や頤和園に案内して頂いた。同年８月に開催された北京フォーラムにもお招き頂いた。胡軍教授ご逝去の訃報に接し、ご遺族と北京大学哲学系にお悔やみを申し上げたのは2022年８月であった。

2009年前期に台湾大学中文系で陽明学派の講義を担当した間に、中央研究院文哲研究所、台湾大学哲学系、同日文系、台湾師範大学国文系、政治大学中文系、清華大学哲学系、高雄師範大学経学研究所などで、陽明学派、禅と剣道、江戸儒学、武士道、武道伝書などについて講演し、シンポジウムにも参加して交流に努めた。

また、2013年と2018年に北京外国語大学日本学研究センターの郭連友教授の招待で一ヶ月間の集中講義を担当した。武漢大学哲学系の呉根友教授や欧陽禎人教授、浙江省社会科学院の銭明先生など、諸先生から、何度も陸王心学のシンポジウムに招待された。学術交流を進める上で重要なことは、研究機関同士の交流協定を結ぶことよりも、お互いに名前と顔を認識している研究者同士の信頼関係を築くことにあると実感している。

明末清初期における参禪悟道とその資料

花園大學
野口　善敬

ずいぶん昔、まだ九州大學の助手で明末清初期の論文を書き始めていた頃、後輩から「野口さんの論文は、どれくらいの人が讀むんですか」と尋ねられたことがある。考えてもいない質問だったので「5，6人くらいかなあ」と答えたと記憶している。私の實兄は理學部出身で生物物理化學を研究していたが、ある學會の發表のあと、マスコミ關係者から、「先生の研究は何の役に立つんですか」と聞かれ、「基礎研究ですから、回り回って將來何かの役に立つかも知れませんね」と返答したとのことだった。

現實社會に廣くしかも今すぐに役立つかどうかが世間の關心事であり、「古之學者爲己、今之學者爲人」という中國の美風も、目に見える形での結果を示すことができなければ、單なる自己滿足として切り捨てられるのであろう。

私の研究對象は宋代以降、清朝初期にかけての禪佛教であるが、禪宗の標語として、「不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛」の四句が良く知られている。これらの言葉は文字通り禪の本質を示した言葉であり、禪門の獨特の立場を鮮明に表している。

前半の二句は佛教の眞理は文字言句で表現できない、つまり客觀的に概念化し頭で理解できないという主張である。後半の二句は、ではどうすれば良いのかという疑問に答える、いわば解答とも言うべきもので、自分の心こそが佛性に他ならないことを自分自身で見て取れば良いのだという答えになる。ある意味、究極の自己滿足の世界なのかも知れない。

そのため禪の修行は、この「見性」つまり悟りを得るという一點に全精力を傾けることになり、師家は弟子にその悟りを得させるためにさまざまな指導を行うことになる。「不立文字」という主張とは裏腹に、禪僧は結構お喋りであり、その言行錄ともいうべき『語錄』は莫大な數が殘されているが、そこに述べられた内容の多くは、弟子たちを悟りに導くための教示、もしくは悟りを開いた自身の境地の吐露となっている。

この悟りに導くための教示の一環として、特に明末清初期の『語錄』に數多く見える文章に一種の傳記資料がある。禪僧の傳記は『傳燈錄』などの燈史類にも見えるし、明代初期以前の語錄には、その禪僧の行履について述べられた「塔銘」「行狀」「行錄」「年譜」の類が40點ほど見出せる。『臨濟錄』の「行錄」が代表的なものである。しかし、これらの文章は本人の與り知らぬ他撰であり、遷化した僧の行履を稱讃するための文章である。

これに對し、明末清初期には他撰ではなく自撰・自述の形式で、自らの悟道に至る參禪行脚の歷史を述べた文章が數多く現れる。その祖型となったのは明の南藏・北藏に入藏された宗寶本『六祖大師法寶壇經』の「行由第一」であったと考えられるが、『壇經』では六祖が自發的に自ら説いた體裁になっているのとは違い、多くの場合、弟子たちから無理に請われてやむを得ず自ら話した形式となっている。いわば自慢話の類であり、考えようによっては譽められたものではないが、禪僧の來歷を研究する上では非常に有用な資料である。管見の及ぶ範圍で自述が76點、自撰が９點、合計85點が存在している。何れも自らの修行歷を述べたものであるが、その名稱は自述が「行實」「行由」「行略」「行脚」、「行錄」、自撰が「年譜」

「自傳」「自塔銘」などと種類豊富で多彩である。

興味深いのは、その中に各々の禪僧が悟道に至った經緯が詳細に述べられていることである。具體的な悟道因緣が明示されているのは、全85人中、45人で72箇所である。

釋尊は菩提樹の下で曉の明星を見て大悟したとされており、物を見て悟るという範疇は後世「見色明心」と稱されているが、明末清初期には「蛇を見て（睹蛇）」（『一初元禪師語錄』「行實」）、「虫を見て（睹溝中蠓虫）」（『永濟融禪師語錄』卷下「行實」）悟った等という禪僧が何人かいる。また『金剛經』の一節を聞いて悟った六祖慧能ばりの、「『楞嚴經』の言葉を聽いて（聽楞嚴經）」（『入就瑞白禪師語錄』卷16「行腳」）悟った者もいるが、何れにしろ数は多くない。

悟った機緣で一番多いのは、音や聲を聞いて悟るいわゆる「聞聲悟道」である。本邦の一休宗純が「鴉の鳴き聲を聞いて（聞鴉）」（『東海一休和尚年譜』）、白隱慧鶴が「遠くの寺の鐘の音を聞いて（聞遠寺鐘聲）」（『白隱和尚年譜』）それぞれ悟りを開いたのが有名であるが、一休同樣、「蝦蟇の三聲を聞いて（忽蝦蟆連叫三聲）」（『見如元謐禪師語錄』卷末附錄「行實」）や「驢馬の鳴き聲を聞いて（忽聞驢鳴）」（『天隱和尚語錄』卷15「行由」）といった鳴き聲で悟った者や、白隱のように「報鐘の聲を聞いて（聞報鐘聲）」（『綠蘿恒秀林禪師語錄』卷下「行實」）、「報鐘が鳴るのを聽いて（忽聽報鐘鳴）」（『昭覺竹峰續禪師語錄』卷5「行實」）、「報鐘の聲を聞いて（忽聞報鐘響）」（『笑堂和尚語錄』「行實」）、「經行していて鐘の聲を聞いて（正經行間聞鐘聲）」（『入就禪師語錄』卷16「行腳」）、「五鼓の鐘の聲を聞いて（至五鼓聞鐘聲）」（『別牧純禪師語錄』卷末附錄「行實」）などと「鐘」の音で悟道した者が多くいる。２番目に多いのが「のっけから一棒を食らわされ（被劈頭一棒）」（『奇然智禪師語錄』卷下「行繇」）、「棒打り續けて追い出され（連棒打出）」（『百癡禪師語錄』卷29「行實」）、「如意を持ち上げて一擊され（執起如意一擊）」（『佛冤禪師語錄』卷10「行繇」）など、棒喝機用の類であり、日本の黄檗禪に連なる明末清初期の臨済禪の特色が如実に現れている。その他、「樓閣から足を滑らせて（不覺失足墜樓）」（『林野奇禪師語錄』卷6「行實」）、「樓閣で蛇を見て足を踏み外して（登樓睹蛇、悚然失足）」（『一初元禪師語錄』「行實」）、「街中で蚌の殼を踏んで（偶街市中行、蹋著蚌殼）」（『雲溪俍亭挺禪師語錄』卷18「侍者智淙輩請說行腳」）、「窗の外から寒風が吹いてきて（忽窗外一陣風吹入）」（『隱元禪師語錄』卷10「行實」）、「經行していて露柱に撞って（經行次撞著露柱）」（『大方禪師語錄』卷6「行實」）、「椅子を運んでいて（一日搬椅子）」（『古林如禪師語錄』卷4「行實」）など、バラエティに富んだ因緣が記されている。

また、悟道の回数も禪僧によってさまざまであり、その回数は１回が25人、２回が15人、３回と４回がそれぞれ１人、５回が２人となっており、南宋の大慧宗杲が「大悟は一十八遍、小悟は其の数を計らず（大悟一十八遍、小悟不計其數）」（『竹窗二筆』「大悟小悟」）と述べたとされていることが思い起こされる。日本の白隱慧鶴が３回悟道したことも良く知られており、複数回の悟道は別に珍しい話ではない。しかし、どの時點での悟りが最終的な悟りであり、どの時點で印可を受けたかという嗣法に關わる微妙な問題も潜んでおり、當時の禪門における嗣法制度の在り方を知る手掛かりとなる。

ともあれ、面白い論文が書けそうなので數年前に資料を揃えたのだが、そのままほったらかしになっている。そもそも自分は悟ってもいないのに他人が悟道した機緣を問題にするのは無意味なことだと言われそうだし、他人が悟った回數を問題にするのは、漱石が『草枕』で言っている他人の放屁の數を勘定しているのと大差ないような氣がする。

もちろん學問研究である以上、「實事求是」で臨んで良いのだろうし、それぞれの學者の研究方法に異議を唱える氣は毛頭無いが、できれば孔子の「爲人」の學と重ね合わせた研究でありたいと願うのは年寄りの戯言であろうか。

中国若手学者の日本中国学会参加体験談

雲南大学
李　曌宇

去年の十月、久々に東京に戻り、学会に参加しました。

私の学会デビューは博士一年時に参加した日本中国学会の第70回大会でした。今回は就職以来初めて参加したオフラインの学会で、同じく日本中国学会であることに縁を感じます。

博士論文を提出してから三年が経ちました。この間、就職活動や授業の準備に忙しく、論文の修正や日本の研究者の方々との交流の機会は全くありませんでした。去年ようやく大学の仕事のペースにも慣れてきたので、研究室に預かってもらっている学位証を受け取り、もう一度先生方や昔の学友に会いたいと思いました。ちょうど友人から『日本中国学会便り』が届いたと聞き、研究発表を募集していることを知ったため、参加したいと思って応募しました。この機会に日本の中国学の最新の進展や、近年出版された著作を知ることができて、有益でした。

私が参加したのは文学・語学部会（A）の研究発表でした。私の報告テーマは「『清』でイメージされた空間とその奥底――『上巳』の詩を軸として」で、晋宋の詩風と世風を繋げることを試みるものでした。実は博士論文を書いたとき初歩的に構想したものですが、資料的にも論理的にもいくつかの問題があると感じていて、今回の学会をきっかけに、思考を整理し直し、論文を修正したいと思いました。当初は筋立てを整理し直して、レジュメを作ろうと思っていましたが、授業の準備など様々な事情で時間がきつく、配布用資料もちゃんと準備できず、四ページの簡略なレジュメしか作れませんでした。将来補う機会があることを望んでいます。

帰国後３年間日本語を話す機会が少なく、とても緊張しました。幸い司会の先生は元指導教員の齋藤希史先生で、会の前に丁寧に私の不安を聞いてくれて、安心できました。発表の時も質問をより明瞭に説明してくださり、おかげで無事に対応することができました。牧角先生をはじめとする研究者の方々からも示唆的な質問をいただきました。学会報告は内容が充実していればいるほど、質問者からいただける意見やアドバイスもより具体的で啓発的になり、自分が学会の場を通して得ることができる収穫も多くなります。これは以前に学会に参加したときから分かっていたことです。今回の報告も、より一層工夫を凝らして、発表内容の筋立てを練ったほうがよかったと反省しています。

自分の発表が終わった後は、その楽しさと悔しさが入り混じった興奮に浸り、他の報告者の発表を聞き続けました。一昨年から雲南大学で中国古代文学史の講義をしています。その中で、漢賦や左思は重要な知識のポイントだと感じてきました。そのため榊原慎二氏の「両漢時代の紀行賦にみられる構造変化――故事と風物の関係を中心に」と楊春雨氏の「『洛陽紙貴』考――史書の編纂における修辞性について」の発表をとくに興味深く聴きました。榊原氏は移動中の風物に対する綿密な考察によって紀行賦の構造変化を論じ、楊氏は有名な典故の「紙」は「貴」なのかという点に着眼し、史書の編纂について研究しました。日本の中国学研究は精緻な文献研究をすると、中国ではよく言われます。両氏の報告を通じて、普段の文学史で論述されない細かい箇所や、気づきにくい視点を聞くことができました。私自身にとっても、日本の中国学研究の特徴をあらためて考え直す良い経験に

なりました。今後、日本の良い点を活かしながら、自分なりの研究を発展させたいと思っています。

午後の発表と次世代シンポジウムを楽しみにしていましたが、会場へ向かう途中に一階に並んでいた本屋さんに目を惹かれて、大量に買ってしまいました。あいにく三連休なので、近くの郵便局が営業しておらず、新宿まで行って郵送するしかありませんでした。そのため午後の発表を聞き逃してしまいました。ただ偶然にも、本屋さんの前で研究室の先輩である加納留美子さんと出会いました。最後に会ったのは六年前の加納さんの博士論文審査会でした。あの時審査された博士論文が既に出版され、翌日の書評シンポジウムの主役になりました。中国語には「物是人非」という、本来は少し寂しく、悲しいニュアンスを持っている語があります。四年ぶりに再び日本に来て、当時の先生方や先輩たちに会った時、景色は変わらず、人は変わったけれども、むしろ皆さん成長して立派な学者になっていました。それを見て、寂しいどころか、心が満たされました。

本を郵送したため午後の研究発表を逃したのは残念でしたが、後悔はしていません。中国から日本の研究書を手に入れるのは容易ではなく、このようにブックスタンドに並んだ本を目の前で見ることのできる機会は言うまでもなくありません。時間が限られていましたので、神保町ブックフェスティバルには間に合いませんでしたし、神保町の本屋さんに行く時間もありませんでした。会場での本屋さんの出展はちょうどその心残りを補ってくれました。日本の中国学に関する研究書がもっと簡単に手に入るようになること、さらに今後の学術交流の機会が増えることが期待されます。

昨年は日中学会のほか、北京師範大学珠海キャンパスで開催された「第五届早期中国経典研究国際学術研討会」にも参加しました。私が中国でオフラインの学会に参加したのは初めての経験です。私の体験に基づきますと、日本と中国の学会の形は違います。発表・コメントの流れは同じです。ただ日本中国学会ではコメンテーターを司会の先生が務めるのに対して、中国の学会では発表する学者が互いに意見を出し合うことが多いと思います。司会を務める先生も発表します。そのため、会議中も円卓をかこんで座ります。少し残念なことには、中国の学会では聴衆からの質問がほとんどありません。批判であれ肯定的な意見であれ、発表の機会に多くの人から意見をもらうことは意味があります。また中国の学会では、当日レジュメのような資料を出す例もないわけではありませんが、ほとんどの場合ほぼ完全な形式の論文の提出が必要で、論文集を作成して参加する学者に配布します。私が参加した学会はまだ多くないので、すべてそうなのかどうかは分かりませんが、中日両国の学会にはそれぞれ特徴があるように感じます。

現在、中国の有名大学では、多くの場合テニュアトラックが実施されています。この制度では、3年あるいは6年で審査を受けることになり、審査基準として論文や研究プロジェクトの数量や質が要求されます。若い研究者は研究のプレッシャーを強く受けていると言えます。そのため学会交流などのような、視野を広げ同業者と交流できるプラットフォームが極めて重要な存在です。大学によっては、学会、特に国際会議に対して経済的な支援をしていますので、中国研究者の参加意欲は強いと考えられます。現在のところ、日本の学会に参加する中国の研究者は多くなく、しかもほとんどは日本に留学や訪問した経験のある人に限られているようですが、日本における中国学の研究伝統は長く、質も高いため、私の知る限り、交流を望んでいる研究者は少なくありません。さらに近年は、中国において、日本の中国学史や日蔵漢文文献を研究する学者も多くいて、今では「顕学」になるほどです。良いチャンスがあれば、参加者が増えるだろうと思います。

この度、学会に参加する機会を得られ、大変ありがたく思っています。未熟な若手学者ですが、これから日本の学界とさらに深く交流し、学び合う機会があることを期待しています。

国内学会消息（令和６年）

◉北海道大學中國哲學會

例會

１月26日

修士論文成果發表會

・『鬼谷子』によって考える縦横家・蘇秦の術に関する研究―捭闔篇と反應篇を中心に　張　楽融

２月22日

・（虎斤）簋銘文に見える「作册憲尹」について　和田　敬典

４月23日

・民国時期の学校における読経問題について　吉田　勉

５月31日

・隨州孔家坡漢簡「歳」篇における數術家的特徴　何　松延

・『文心雕龍』の「意象」―『論衡』との比較を通して　凌　玲

６月28日

・『論語』における「唯女子與小人爲難養也」の解釈に関する研究　白　亮

・『塩鉄論』軽重篇研究　武　憶岩

・『黄帝四経』について　徐　正丁

７月26日

・『性自命出』における禮・楽・教について　王　耀瓏

・『商君書』における「姦民」について　劉　如玉

・『東坡易傳』による蘇軾の性命観の研究　王　玉婷

８月23日

・『伝習録』における王陽明の死生観―朱熹との死生観を比較　姜　豊

・敦煌本『論語』と『論語鄭氏注』について　易　露

・卜筮祭祷簡の異同に見える二三の問題―望山卜筮祭祷簡を中心に　趙　珊

９月27日

・時令文章の基礎研究―『禮記』月令を例にして　張　越

・『周易集解』説卦、序卦、雑卦の研究―虞翻の注を中心に　朱　俊斉

10月25日

・知北遊における「無爲而無不爲」　莫　寒

12月６日

・『隠逸詩人：陶淵明』（熊征 著）の刊行に寄せて　近藤　浩之

北海道大學中國哲學會第54回大會・科研費基盤研究B「中国近世考証学研究」合同シンポジウム（ハイブリッド形式）　９月14日

・『文心雕龍』における「意象」―『論衡』との關係性を中心として―　凌　玲

・元弘相傳本『五行大義』にある「説文云、地反物爲秋」は『淮南子』許慎注由来である可能性の試み　路　勝楠

・王応麟の学術、特に北宋から南宋初期の学術との関係　青木　洋司

・清朝考証学の詩経学（戴震を中心にして）における宋代詩経学の継承と変容について　種村　和史

・今文学者の漢学・宋学観　吉田　勉

・馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』における石鼓文活用法の問題点　和田　敬典

・王応麟と清朝考証学者　水上　雅晴

（趙　珊　記）

◉北海道大學中國語・中國文學談話會

談話会

第271回　２月29日

・ヒゲと宦官の身体表象―医書の視点から―　市村俊太郎

・『金瓶梅詞話』における「門」と女性の情欲　熊　征

・『婦女雑誌』成長期と女性像についての考察　趙　海涵

・白石詞における「冷」表現について　張　江林

第272回　12月21日

・《獅子山下》與香港70-80年代的社會與文化發展

唐　　睿

刊行物

『火輪』第45號（３月）

『饕餮』第31號（９月）

（張　　江林　記）

◉秋田中国学会

春季第175回例会　５月18日　於秋田大学

・魏晋期における都城の構造の変化とその背景

内田　昌功

秋季第176回例会　11月30日　於秋田大学

・「天」の宗教と「道」の哲学

—老子哲学の出自—　吉永慎二郎

（羽田　朝子　記）

◉東北中国学会

第72回大会 ５月25日 於福島大学（中国思想・中国文学分野のみ抜粋）

・紀行文学前史としての劉向「九歎」—屈原「九章」と劉歆「遂初賦」を繋ぐもの—　榊原　慎二

・隋唐『詩経』学研究序説　髙崎　駿士

・唐・道宣の仏教史学と感通　齋藤　智寛

（齋藤　智寛　記）

◉東北シナ学会（中国思想・中国文学分野のみ抜粋）

二月例会　２月20日

［修士論文発表会］

・楚辞「九歎」の研究

—望郷の要素を中心に—　榊原　慎二

・『老子想爾注』の思想　張　　曉迪

・白居易の作品に見える仏教思想　兪　　飛

（高橋　　亨・菅原　尚樹　記）

◉東北大学中国哲学読書会

第211回　12月27日　於東北大学

［研究発表］

・羅近溪における経書重視

—「学」の視点からの考察　潘　　虹智

［学術講演］

・朱子学の諸相—「心」の理解をめぐって　藤井　倫明

（高橋　　亨　記）

◉東亞古典詩學新視域國際會議

中国語学中国文学研究室、中山大学（台湾）共催

７月10日　於東北大学

・關於元明代《聖蹟圖》中的兩箇系統　土屋　育子

・隋唐《詩經》學的一個側面：

圍繞劉迅「説詩三千言」的評估　髙崎　駿士

・《韓詩外傳》中的詩句與散文

—以《荀子》援用文為焦點—　岡本　光平

・杜牧《早行》與温庭筠《商山早行》：

早行詩史中的典型與創新　鈴木　政光

・再論漢代騷體賦的歴史典故：

以擬騷之作與初期紀行賦爲中心　榊原　慎二

・上古音可以適用于漢代韻文嗎？　田島　花野

・從王延壽《魯靈光殿賦》到何晏《景福殿賦》

木村真理子

・日本明治大正時期的楚辭學　矢田　尚子

（菅原　尚樹　記）

◉筑波中国学会

研究発表会　於筑波大学

８月７日

・李白と水　小倉　麻由

・『三国志演義』における関羽の義と人物像の研究　松嶋　倫子

・曹丕『典論』の全体像とその影響　水谷　文音

10月17日

・志怪小説としての『夜窓鬼談』　欧陽　懐蒙

11月14日

・韓翃の何遜詩受容　福原　早希

（稀代麻也子　記）

◉中国文化学会

大会　６月29日　於常磐大学

［研究発表］

・道教鉄罐施食儀礼の文献比較研究　范　玉愷

・「史記」列伝における「恥」の意義に関する考察　鹿島　脩太

・『陶淵明集』の異文について　宇賀神秀一

・李商隠と「法華経」　加固理一郎

・「國語一字多音審定表」が台湾の教育界および一般社会にもたらした影響について　樋口　靖

・論語鄭玄注に疏は作られたか　高橋　均

［講演］

・水戸藩の学問から学ぶもの　鈴木　暎一

例会　３月10日　於大妻女子大学

・呉昌碩早期における文人的思考の考察　利根川千枝子

・徐霞客遊記地形語彙緒論
　―楚遊日記を材料に―　薄井　俊二

刊行物

『中国文化―研究と教育―』第82号（６月）

（内山　直樹　記）

◉お茶の水女子大学中国文学会

大会　４月13日　オンライン開催

・中国語の連体修飾構造の歴史的変遷　橋本　陽介

・李白テクストの揺らぎ　和田　英信

７月例会　７月６日　オンライン開催

・江戸期における徐渭詠雪の受容と変容　鄭　瑞雪

９月例会　９月７日　オンライン開催

・「行旅」の空間とその変遷
　―宋・斉・梁の詩を中心に―　董　子華

・江戸後期における杜甫詩の評価と受容　趙　美子

12月例会　12月７日　オンライン開催

・中島端・中島竦・中島比多吉と近代中国―資料から読み取る中島敦の伯父と叔父の仕事　閻　瑜

（竹野　洋子　記）

◉六朝学術学会

第28回大会　９月７日　早稲田大学（ハイブリッド形式）

［報告］

・黄省曾本『謝康楽詩集』とその「古本」について―温州における謝霊運の伝承を手がかりに　鮑　功瀚

・後漢における天下観と交阯刺史部　青木　竜一

・斉梁艶詩と仏教　大村　和人

・漢魏における楚歌体について　谷口　洋

・曹植の文学と西晋時代の人々　柳川　順子

第45回研究例会　３月16日　於國學院大學（ハイブリッド形式）

［報告］

・裴松之『三国志注』受容
　―清代前期の李光地を題材に―　佐藤　大朗

・王弼の政治思想と郭象の政治思想　伊藤　涼

・鬼怪を食べる話　王　旭東

・六朝時代の死生観に関する一考察
　―鎮墓文と墓誌の比較を中心に―　福原　啓郎

刊行物

『六朝学術学会報』第25集（３月）

（山崎　藍　記）

◉日本杜甫学会

第８回大会　９月６日　横浜国立大学（オンライン併用）

［研究発表］

・錢謙益と杜詩詳註―清代禁書とその疎漏　佐藤　浩一

［シンポジウム］

教材としての杜甫の詩

・杜甫「春望」から広がる世界　高芝　麻子

・国語教材としての杜甫の古体詩　大橋　賢一

・高等学校『言語文化』『古典探求』における杜甫詩を扱った実践　潮田　央

◎刊行物

『杜甫研究年報』第７号（３月）

（紺野　達也　記）

◉中唐文学会

第35回大会　於國學院大學

［研究発表］

・李程と劉禹錫―『源氏物語』葵巻所引「有所嗟」二首其一を契機として―　石村　貴博

・孟郊の復古手法―声律の視点から―　徐　新源

・高適の詩における「仕隠の間」の人生観―漁樵のイメージを中心に　劉　孟磊

・李紳「虎不食人」・「憶寿春廃虎坑」研究　席　暢

・「陋室銘」が劉禹錫の作品となった一端について　荒川　悠

・柳宗元の「天対」について―倣古表現と「天」観を中心に　鈴木　達明

［シンポジウム］

・『中興間気集』から見た詩史の諸相

パネリスト：大村　和人・大橋　賢一・福原　早希

コメンテーター：紺野　達也

司会：高芝　麻子

刊行物

『中唐文学会報』第31号（10月）

（鈴木　崇義　記）

◉日本宋代文学学会

第11回大会　５月18日　於明治大学

［研究発表］

・曾鞏〈南軒記〉〈學舍記〉中窮獨而安的個人空間書寫　呉　潔盈

・晩年の張耒と「和陶詩」　原田　愛

・士人と「義」―楊万里の墓誌銘について　岑　天翔

・干謁の意義―南宋江湖詩人の矜持と職分―　阿部　順子

・方回《瀛奎律髓》律詩格律的規範與意義　詹　卉翎

・詞の「豆」に関する一考察―データベース活用の試み　張　亜琳

第３回宋代書簡シンポジウム

JSPS 科研費基盤 (B)「宋代書簡に関する総合的研究」主催／日本宋代文学学会共催

・宋代尺牘編集與文學觀念　介　志尹

・宋元啓劄類書的分類與應用　余　筠珺

・書簡與旅路―北宋文人的寄書、得書與留書　張　蜀蕙

・宋代の「書」再考―劉克荘の書信を手掛かりとして―　平田　茂樹

・総合討論

刊行物

『日本宋代文学学会報』第十一集

（奥野新太郎　記）

◉日本聞一多学会

第27回大会　11月９日　於二松学舎大学

［研究発表］

・《左冲右突：在诗学秩序与积极自由之间――一个新的阐释闻一多新诗创作与批评的角度》　杨　四平

・朱自清『詩言志辨』「正變」編について―変風・変雅と詩の機能―　牧角　悦子

刊行物

『神話と詩』第21号（３月）

（横打　理奈　記）

◉全国漢文教育学会

https://www.zenkankyo.gr.jp/

講演会　３月９日　於斯文会館

・教学相長ず―教育者としての諸橋轍次先生―　塚田　勝郎

第39回（通算69回）大会　７月12日・13日　於北海道教育大学旭川校

・［研究授業］小学六年「漢字の広場 二　複数の意味を持つ漢字」　福西　晟歩

・中学校と高等学校をつなぐ授業の実践―『平家物語』と『日本外史』の比較読みを通して―　奥山　晃

・言語文化「唐詩の世界」の実践報告　佐々木千紘・大橋　賢一

・ユニバーサルデザインに留意した漢文導入授業の実践―「朝三暮四」を用いて―　須賀　大陽

・漢文文法論とサブテキストの提案　薄井　俊二・鹿島　脩太

・司空曙送別詩論　福原　早希

・辺塞詩としての蝦夷漢詩―幕末道南にゆかりの詩人を中心に―　泊　功

・［記念講演］杜甫「春望」再読　後藤　秋正

第40回漢文教育研修会　８月８日～10日　於斯文会館

・杜甫「春望」とその時代　高芝　麻子

・明治の実業家と漢学―渋沢栄一の『論語』を中心として―　町　泉寿郎

・鄙陋と挺儁の間―隋文帝の外戚呂道貴の歴史像―　会田　大輔

・漢文教材における元稹と白居易　長谷川真史

・『列子』の寓話―その哲学的合意―　内山　直樹

・漢詩の作り方・教え方　鷲野　正明

（松野　敏之　記）

◉東アジア漢字文化学会

第１回例会　６月15日　於湯島聖堂

・オープニング演奏　ベートーヴェン弦楽四重奏曲第13番５楽章「カバティーナ」　アンサンブル凛

・会の基本性格と活動内容の確認

第２回例会　７月27日　於湯島聖堂

・オープニング演奏　チャイコフスキー　弦楽セレナーデ　２楽章「ワルツ」　アンサンブル凛

［研究発表］

・「墓誌」と「文学」の境界―中唐の韋応物を例として　土谷　彰男

・日本の表象文化と『論語』（１）―究極の「悌」（『鉄腕アトム』―〈白い惑星号の巻〉より）　宇野　直人

第３回例会　９月28日　於京橋〈ワークスペース TOKYO〉

［研究発表］

・日本の表象文化と『論語』（２）―「義」と「利」とのはざまで（『鉄腕アトム』―〈イワンの馬鹿の巻〉より）　宇野　直人

第４回例会　11月16日　於恵比寿〈FRIENDS XII〉

［研究発表］

・日本の表象文化と『論語』（３）―真の「恕」とは（『鉄腕アトム』―〈ロボット学校の巻〉より）　宇野　直人

（齋藤　幸子　記）

◉日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注検討會

８月31日、９月１日　於中京大学（オンライン併用）

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討

『唐宋名家詞選』譯注検討會

３月16日、17日　於日本大学（オンライン併用）

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

小風絮會（『唐宋名家詞選』譯注）

２月17日、６月１日、７月６日、８月10日、11月２日、12月14日　於立命館大學（オンライン併用）

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

刊行物

『風絮』第21號（12月）

（藤原　祐子　記）

◉國學院大學中國學會

第226回例会　１月６日　ハイブリッド開催

・楚辞「九章」における喩言の機能について　今瀬英一朗

・劉向の晏子評価　長谷川清貴

第227回例会　10月26日　ハイブリッド開催

・道教儀礼とその周辺に用いられる灯について
　—台湾台南地域を例として　富田　綾美
・王應麟『困學紀聞』における『尚書』解釈について
　青木　洋司

第227回例会終了後、研究会成果報告（ハイブリッド開催）

第67回大会・総会　10月27日　ハイブリッド開催

［公開講演］

・杜甫と蘇軾の風景表現について　宇佐美文理

［研究発表］

・高等学校の教育課程における漢文教育の位置づけ
　～高校の現場から見た漢文教育の現状～　浅見　和寿
・『日本外史』訓読本の出版について—出版・著作関連法令の変遷を背景として—　佐川　繭子
・松平定信の経世思想について　大場　一央
・唐代小説集『宣室志』について　澤﨑　久和

研究会

・唐代文学研究会（毎週月曜日、火曜日、毎月土曜日、対面）—『宣室志』・『唐詩解頤』の読解　澤﨑　久和
・中国哲学史研究会（毎週木曜日、対面）
　—『初学知要』の読解　青木　洋司
・中国現代文学研究会（毎週木曜日、対面）
　—謝冰心《再寄小読者》の読解　牧野　格子
・中国礼俗文化研究会（毎週火曜日、対面・オンライン併用）—『老子想爾注』の読解　浅野　春二

中國學會奨励章表彰　３月17日

［卒業論文］

・『詩經』鄭風「女曰雞鳴」小考
　—贈報行為に注目して—　大塚　翔也

刊行物

『國學院中國學會報』第70輯

『崑崙』第238号～第240号

（鈴木　崇義　記）

◉早稲田大学東洋哲学会

第41回大会　６月８日　於早稲田大学

［研究発表］

・魏相の災異思想　李　龍
・ジャイナ教議論学における議論の勝敗条件
　—ダルマキールティ批判の観点から—　須藤　龍真
・別理随縁説に対する宋代天台諸師の反応—南宋天台山家派における諍論を中心に—　久保田正宏
・三宅雄次郎『日本仏教史』考察
　—雪嶺哲学の萌芽として—　梶田　祥嗣
・中世浄土宗における正統
　—聖冏・聖聡著作を中心に—　鈴木　英之

［講演］

・法称の論理学における主張命題構成の基準としての聖言と世間承認　岩田　孝

刊行物

『東洋の思想と宗教』第41号（３月）

（武本宗一郎　記）

◉早稲田大学中国文学会

第49回春季大会　６月22日　オンライン併用

［研究発表］

・『新中国未来記』第五回作者考　施　冰媛
・明代伝記『金貂記』成立考
　—薛家将故事の発展をめぐって　柴崎公美子
・『新修玉篇』の『廣集韻』出典字について　高山　亮太

［講演会］

・『網川集』はいかに読まれてきたのか　紺野　達也

第49回秋季大会　11月30日　オンライン併用

［研究発表］

・『山家清供』に見る宋代食譜の文芸的特徴について
　元吉さつき
・香港人になれるか
　—近年香港映画に描かれる南アジア人　張　宇博
・森槐南と『補春天伝奇』—陳碧城『頤道堂集』との関わりを中心　中村　優花

［講演会］

・中国の SNS 流行語における創造的な語構成法　張　恒悦

刊行物

『中国文学研究』第50期（創刊五十年記念号）（12月）

（紺野　達也　記）

◉慶應義塾中国文学会

http://www.keiochina.jp/top5-chugokugakkai.html

第九回大会　2024年７月13日（土）　於慶應義塾大学日吉キャンパス

・中国における民族言語学の研究について　孟　達来

・金聖嘆本『水滸伝』の怒り描写と批評　石川　就彦

・日本占領下上海における東亜聯盟運動―『中国与東亜』及び中華日報副刊「東聯週刊」を中心に　山口　早苗

・袁紹とその臣下から見る毛宗崗本『三国志演義』の人物評価について　鵜浦　恵

・日本人教師の中国語発音教育の実証的考察　丁　雷

刊行物

『慶應義塾中国文学会報』第九号　2025年３月

（須山　哲治　記）

◉名古屋大学中国哲学研究会

第100回名古屋大学中国哲学研究会　７月13日

・近世期邦儒の左伝観の変遷　荒川　兼汰

第101回名古屋大学中国哲学研究会　９月30日

・「徂徠山人外集」とその漢籍版本について　堀尾　裕真

刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第23号（５月）

（佐野　大介　記）

◉京都大学中国文学会

興膳宏先生お別れの会　３月20日　於京都大学

第39回例会　７月20日　於京都大学

・空海の書論とその典故　仲村康太郎

・「碩人」をさがして―植物と昆虫と美のゆくえ　稲垣　裕史

・『三国志演義』『水滸伝』から『金瓶梅』へ―近代的読書・近代的小説成立の観点から　小松　謙

刊行物

『中国文学報』第97冊（2023年10月）

『中国文学報』第98冊（2024年10月）

（緑川　英樹　記）

◉中國藝文研究會

〇合評會及び研究會

合評會・研究會　４月27日　衣笠キャンパス末川記念会館第二会議室・オンライン開催

・『法言』の主題と楊雄の思想　嘉瀬　達男

・高攀龍の顯彰活動とその思想史的意義　尾崎順一郎

研究會　９月21日　衣笠キャンパス清心館二〇六教室・オンライン開催

・『説文解字』部首の配列について―「鬲」部の位置問題　陳　銘

・『捜神記』にみる死後復生　許　暁璐

・田能村竹田詞研究―『閉門』と『旅窗』　王　愷珺

合評會・研究會　11月17日　衣笠キャンパス清心館二〇六教室・オンライン開催

・大阪天満宮所蔵（近藤元粹旧蔵）の『草堂詩餘』について　萩原　正樹

刊行物

『學林』第78號（６月）

『學林』第79號（12月）

（宮本　紗代　記）

◉東山之會

研究発表　於京都女子大学（オンライン併用）

２月18日

・岑参の辺塞前と辺塞詩　黒瀬加那子

３月25日

・賈島『長江集』と重出詩について　愛甲　弘志

４月20日

・李杜交遊考　乾　源俊

６月22日

・中晩唐詩の舶来と平安朝佳句集の編纂　陸　穎瑤

7月20日

・新学習指導要領の国語教科書における漢字・漢文教材について　長谷川真史

11月23日

・『本朝文粋』本文校訂　于　永梅

12月14日

・近代中国における菊池寛の女性言説について　陳　竹

『長江集』譯註　2月18日～12月14日

巻五「石門陂留辭從叔謩」至「泥陽館」

（加藤　聰　記）

◉阪神中哲談話会

第407回例会　11月2日　於奈良教育大学（オンライン併用）

共催：科研基盤C「中国近代における中国古代史と経学史の邂逅と融合に関する総合的研究」（代表：井澤耕一）

特集「20世紀前半期における日中学者の邂逅・交渉とその影響関係」

・中国学をめぐる近代日中交渉研究とその意義—近刊『アジア遊学』292号を例に　陶　徳民

・『北平日記』の作者 目加田誠の人生と杜甫の詩情　静永　健

・20世紀前半の漢籍目録に見える日中の影響関係—京都大学人文科学研究所の前身による書目を中心に　永田　知之

・清末民国初期における中国古代史の解釈について—夏曾佑『最新中学教科書—中国歴史』と劉師培『中国歴史教科書』　井澤　耕一

・甲骨四堂と日本　佐藤　信弥

・経学史から中国経学史へ　橋本　昭典

（橋本　昭典　記）

◉懐徳堂研究会

https://www.kaitokudo-kenkyukai.org/

第36回　6月15日　キャンパスプラザ京都（オンライン併用）

・五井蘭洲『茗話』と伝大田錦城『茗会文談』の重複について—『茗話』中巻完全復元への糸口の発見—　湯城　吉信

・近世後期に於ける中井履軒『左伝』解釈の受容　荒川　兼汰

・中井木菟麻呂と景社　竹田　健二

（竹田　健二　記）

◉中国出土文献研究会

http://www.shutudo.org/

第77回研究会　3月26日　オンライン開催

・戦国簡に見える身体・疾病・生命に関する記述について　六車　楓

・北大秦簡『従政之経』について　草野　友子

・安大簡『仲尼曰』小考　中村　未来

第78回研究会　9月20日　オンライン開催

・安大簡『仲尼曰』「管仲善善哉、老訖」の解釈—「老」は「寿」の意味か—　六車　楓

・海昏侯墓出土簡牘と「孔子衣鏡」について　中村　未来

・北京大学蔵西漢竹書『周馴』の全体構成　草野　友子

第79回研究会　10月15日　オンライン開催

・清華簡『管仲』の政治思想　湯浅　邦弘

・北京大学蔵西漢竹書『周馴』の全体構成（第二稿）　草野　友子

（草野　友子　記）

◉広島大学中国思想文化学研究室研究会

第219回研究会　２月13日

［卒修論文中間発表会］

［卒論］

・身体論からみる鉱物系薬物の成立　荒木　遙
・時代に伴う龍の扱いの変遷　澤井　智広
・山海経にみられる鳥　清水　堅登
・異常出生譚がもつ意味について
　―母胎が禁忌を犯した場合を中心に―　鈴木　花
・冥界の使者とその文化的背景について　山本　智惠

［修論］

・儒教思想の武士道への影響
　―山鹿素行を中心に―　鄭　思玟

第220回研究会　11月14日

［卒業論文中間発表会］

・老荘思想の「無」と仏教の「空」について
　井野　梨菜
・『太平広記』精怪に見る文化　田町　貞介
・古代中国の婚礼における用鴈の習俗について　鳥取　美歩

第221回研究会　12月10日

［卒業論文テーマ発表会］

・『呂氏春秋』と『淮南子』から見る戦国末期から漢代における墨家思想　塩原　知紗
・夢の解析―『太平広記』夢部を中心に―　嶋　杏純
・『漢書』五行志に見る災異と女性　吉村明伽音

刊行物（発行人 東洋古典學研究會）

『東洋古典學研究』第57集（５月）

『東洋古典學研究』第58集（10月）

（有馬　卓也　記）

◉広島大学中国文学研究室研究会

第243回　２月９日

［卒業論文最終発表］

・『捜神記』から読み取れる「鬼」の性質　吉本　穂波
・袁無涯本における宋江評について　北村　紘大
・『勧戒図説』巻三・巻四の本事とその内容　岡　正健
・『金瓶梅』における纏足描写
　―鞋および脚帯に注目して―　髙田　真吏
・太平天国の指導者の歌謡　朝霧　健太
・魯迅の改定作業『中国小説史大略』から『中国小説史略』へ　天野　陽香

第244回　６月27日

［修士論文中間発表］

・元稹詩における「睡眠」
　―「背日眠」と「背月眠」を中心に―　蔡　若琪
・李賀詩研究―「長歌續短歌」を中心に―　林　書卉

［修士論文中間発表］

・鮑照「蕪城賦」における「寒鴟嚇雛」の解釈
　―李周翰注をめぐって―　朝霧　健太
・『明状元図考』における「兆し」　李　暁龍
・「三言」における地名の改変　庄　紫昱

第245回　７月25日

［修士論文最終発表］

・『閑情偶寄』と明代の「日用類書」
　―養生観を中心として　李　心怡

［卒業論文構想発表］

・『笑林評』から『笑府』へ　中村　美遥
・『聊斎志異』の恋愛譚における「結末」について
　小堀真依子
・『醒園録』の研究
　―清代四川の食文化を中心に―　三木田愛子
・漢詩人としての乃木希典について　宮地　貴大

第246回　11月28日

［卒業論文中間発表］

・『笑林評』から『笑府』への改作
　―省略・加筆を中心に―　中村　美遥
・『聊斎志異』の異類婚姻譚
　―原話・類話と比較して―　小堀真依子
・『醒園録』の内容について
　―『随園食単』との読み比べ―　三木田愛子
・国内戦争詩について
　―秋月の乱から西南戦争へ―　宮地　貴大

第247回　12月19日

［修士論文中間発表］

・左思「三都賦」における漢賦の語彙の受容　朝霧　健太

・『明状元図考』の序文及び凡例　李　暁龍

・「三言」における地名の改変から見る馮夢龍の編纂手法　庄　紫昱

［修士論文構想発表］

・『太平広記』「異人部」について　黄　点塵

第248回　1月23日

［修士論文最終発表］

・元稹詩研究―悼亡詩における「眠り」表現を中心に―　蔡　若琪

・李賀の典故表現―「滄海桑田」について　林　書卉

（川島　優子　記）

◉中国中世文学会

令和六年度研究大会　10月26日　於広島大学

・岑参の辺塞詩における表現の特色について―「辺塞経験があるからこそ」なのか―　黒瀬加那子

・上杉本『史記』の書入注に見える唐詩考について　趙　祥茹

・『唐詩選』と江戸文芸　馬　艶艶

・六朝詩賦に見る「ふね」―宋以降を中心に―　佐伯　雅宣

刊行物

『中国中世文学研究』第77号（3月）

（川島　優子　記）

◉山口中国学会

大会　12月16日　於山口大学人文学部

『淮南子』泰族訓に見える「五帝三王の道」の思想的特徴について　南部　英彦

（根ヶ山　徹　記）

◉中国四国地区中国学会

第69回大会　6月8日　於山口大学

・『唐詩選』収録作品の主題―『古文真宝』との比較を通じて―　馬　艶艶

・岑参の辺塞詩について　黒瀬加那子

・『尚書大伝』の「聖」　伊藤　裕水

・格物致知と諸子思想　西　信康

［講演］

・『淮南子』と『淮南萬畢術』　有馬　卓也

（根ヶ山　徹　記）

◉九州中国学会

第72回大会　5月11日、12日　於西南学院大学

［講演］

・『論語』訓蒙書研究管見―日用と常人と　石本　道明

［発表］

・張恨水『現代青年』が描く異色の青年像　李　斯琪

・魯迅の上海東亜同文書院講演について―呉渤（白危）の回想文「回憶魯迅先生二三事」を中心に―　崔　子晛

・「罔兩」説話の解釈をめぐって　楢崎洋一郎

・文之玄昌と禅僧との交流について　上ノ原怜那

・山崎美成の漢字文義謎蒐集：随筆と稿本を手がかりに　呉　修喆

・一九八〇年代中国における日本推理小説の受容についての一考察―法制文学雑誌『啄木鳥』を中心に―　孫　平

・袁枚の交友関係と『子不語』の編纂経緯　張　茜

・元稹・白居易の〈苦学〉時代―詩文に記された受験生活―　谷口　高志

・蘇軾の『東坡書伝』における『史記』評価とその意義　湯　青妹

・楊時の「天」の思想について　間柄　拓也

・孫蘭の輿地の説初探　薄井　俊二

刊行物

『九州中国学会報』第62巻（5月）

（藤井　倫明　記）

◉九州大学中国文学会

第328回中国文藝座談会　２月２日　ハイブリッド開催

・『三国志演義』の人物について　奥村　至隆

・岡島冠山の『唐話纂要』と『唐話便用』　平藤　鈴音

・元稹造譜考　長谷川真史

第329回中国文藝座談会　３月２日　ハイブリッド開催

・清代の学者紀昀について　高田　駿

第330回中国文藝座談会　４月27日　ハイブリッド開催

・袁枚の交友関係と『子不語』の編纂経緯　張　茜

・「長恨歌」の日本伝来は何時か　静永　健

第331回中国文藝座談会　７月31日　ハイブリッド開催

・三国故事における馬謖考　安田　英希

・陳子昂「修竹篇」創作考　種村由季子

・明代武官の文学活動、その展開　井口　千雪

第332回中国文藝座談会　９月21日 ハイブリッド開催

・陶淵明の和詩について　土屋　聡

・馬琴の白話学習と応用　孫　琳浄

・銭稲孫の『神曲』翻訳について　稲森　雅子

第333回中国文藝座談会　11月23日 ハイブリッド開催

・発跡変泰譚の構造について　遇　禕揚

・韓愈・柳宗元と宋六大家の文体の相違について　東　英寿

・市河寛斎『陸詩考実』初探　甲斐　雄一

刊行物

『中国文学論集』第53号（12月）

（井口千雪記）

2025－26年度　各種委員会委員の構成

理 事 長：小島　　毅

副理事長：浅見　洋二（担当：論文審査、広報、デジタル化推進、会計）

　　牧角　悦子（担当：大会、出版、選挙管理、研究推進・国際交流）

各種委員会委員（◎：委員長、○：副委員長、◆：幹事）

大会委員会

◎伊東　貴之　○東　英寿　内山　直樹　川島　優子　陳　捷　野村　鮎子
◆近藤　浩之

論文審査委員会

◎小松　謙　○田村　容子　○横手　裕　上原　究一　大平　幸代　近藤　浩之
佐川　英治　佐藤　大志　志野　好伸　末永　高康　高山　大毅　竹越　孝
津守　陽　中　純子　長尾　直茂　濱田　麻矢　林　文孝　古橋　紀宏
堀川　貴司　松江　崇　◆荒木　達雄

出版委員会

◎古勝　隆一　○高津　孝　伊東　貴之　大渕　貴之　下地早智子　鶴成　久章
星野　幸代　◆池田　恭哉

選挙管理委員会

◎渡邉　義浩　○松野　敏之　井川　義次　垣内　景子　稀代麻也子　◆中嶋　諒

研究推進・国際交流委員会

◎鈴木　将久　○齋藤　智寛　池田　智恵　工藤　卓司　酒井　規史　原田　愛
◆佐髙　春音

広報委員会

◎上田　望　○山下　一夫　閻　淑珍　木津　祐子　錢　鷗　◆笠見　弥生
◆陳　佑真

デジタル化推進委員会

◎柳川　順子　○二階堂善弘　遠藤　星希　高芝　麻子　吉田　勉　◆西川　ゆみ

各種委員会報告

【研究推進・国際交流委員会】

委員長　三浦　秀一

一、書評シンポジウムの開催

昨年に引き続き、2025年秋開催の第77回大会においても、「パネルディスカッション」の分科会として書評シンポジウムを実施します。専門領域・所属機関・性別などについて、多様性を考慮したフレッシュなパネルを歓迎します。下記の募集要項をご参照のうえ、ふるってご応募ください。

記

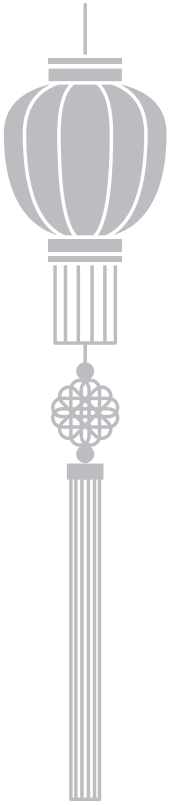
1．構成・形態：著者１名、評者３名程度、司会者１名によるパネル型書評会。
2．時間：報告や質疑応答等を含め、全体で120分以内。
3．締切：「研究発表の募集」（「学会便り」本号裏表紙所掲）の「3．締切」と同じです。
4．応募方法：パネルの代表者（パネル関係者で連絡係をつとめる人）が、パネリスト全員の氏名とフリガナ、所属機関および職位、メールアドレスをともに明記し、書評の対象とする学術書のタイトルと目次に「概要」（800字以内の日本語）を添えて、「研究発表の募集」の「4．応募方法」と同様の方法により、大会準備会宛てに送付してください。応募時にパネルでの役割（司会者・評者）は未定でも構いません。
5．応募資格：著者と司会者、および評者２名は本学会の会員資格を有していることを条件とします。書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、2021年～2023年に刊行されたもの。評者の年齢は、あくまでも原則ですが、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下とします。
6．応募宛先：「研究発表の募集」の「6．応募宛先」と同じです。
7．問い合わせ先：学会事務局 (info@nippon-chugoku-gakkai.org)

二、評者報告の学会ＨＰ掲載

2024年度学会大会（第76回）の書評シンポジウムに登壇された評者各位による報告の文章を、学会 HP の『研究集録』に掲載しました。是非ご一読ください。

三、国際会議の案内

東洋学・アジア研究連絡協議会から国際会議の案内が来ています。詳しくは学会 HP をご覧ください。



事務局より

◎特別寄付金会計寄付者（20万円以上、歴代）

2021年度：加地伸行会員（300万円）

◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関等の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙（ゆうちょ銀行払込取扱票）通信欄でも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。

今年度10月発行の会員名簿には、7月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号（自宅または勤務先）のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います（ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません）。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページの URL をお送りいたします。なお、利用可能ブランドは VISA・MASTER のみです。ご了承ください。

大会日程の変更について

今年の大会（九州大学）は、当初10月11日（土）、12日（日）に開催の予定でしたが、12日（日）、13日（月、祝日）へと変更になっておりますので、ご注意ください。

訃　報

『学会便り』2024年第２号発行以降、次の方のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（敬称略）

今井　清	（近畿地区）	2024年12月15日
萩原　辰郎	（関東地区）	2025年２月11日
田仲　一成	（関東地区）	2025年３月29日
佐藤　保	（関東地区）	2025年３月30日

メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録頂いていない方はホームページの「メールアドレス登録（会員専用）」（URL：https://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2274）よりご登録をお願いいたします。

パスワードは sinology1234です。メールアドレスの変更も、上記の登録フォームから可能になりました。

登録フォームにアクセスできなかった場合は、事務局（info@nippon-chugoku-gakkai.org）宛に、メールアドレスをお知らせください。

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵　　便：〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

第77回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位：

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第77回大会は九州大学が準備を担当し、本年10月12日（日）、13日（月、祝日）の両日、九州大学伊都キャンパスにて開催することとなりました。

（本大会は、当初11日（土）、12日（日）の開催予定でしたが、11日に九州大学の入試が実施されるため、12日（日）、13日（月、祝日）の両日へと変更となりました。ご注意下さい。）

つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2025年４月吉日

日本中国学会第77回大会準備委員会

東　　英寿

記

１．部　　会　：　一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢学（日本思想・日本漢詩文・漢文教育など）
四、歴史
五、パネルディスカッション
Ⅰ次世代シンポジウム
Ⅱ書評シンポジウム（応募方法等の詳細は『学会便り』本号22ページをご覧ください）

２．時　　間　：　一〜四は発表20分に質疑応答10分、五は報告、質疑応答含め全体で120分以内。

３．締　　切　：　2025年６月23日（月）（当日消印有効。簡易書留、レターパック、EMS 等追跡調査が可能な郵送手段でお願いします）

４．応募方法　：　研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公刊のものに限ります。一〜四に応募される方は、氏名（フリガナ・所属研究機関および職位）・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要（800字以内、日本語による）を、大会準備委員会まで郵送すると同時に、それらの Word ファイル（.doc または .docx 形式）を E-mail（ファイル添付）により期日までに送付してください。E-mail 受信時には自動返信します。期日（日本時間）までに電子ファイルが届いていない場合、応募は受理できませんのでご注意ください。
五に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名（フリガナ、所属研究機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、パネルの題目と概要（1,200字以内、日本語による）を、上記と同様の方法により、大会準備会宛てに送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関（研究室等）によって組織されたパネルも可とします。
※応募時の日本語概要をもとに審査を行い、採択結果を通知します。執筆者による校正はないため、完全原稿でお願いします。
＊なお、発表希望者におかれましては、13日（月、祝日）に勤務先の授業等で参加できない場合、その旨をお知らせ下さい。

５．応募資格　：　研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です、五のⅠ「次世代シンポジウム」については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日（６月23日）までに会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。

６．応募宛先・問い合わせ先：　〒819-0395　福岡市西区元岡744　九州大学言語文化研究院
中里見敬研究室（日本中国学会第77回大会準備事務局）
E-mail：2025japansinology@gmail.com

◎本年は、一、哲学・思想　二、文学・語学　三、日本漢学、四、歴史　五、パネルディスカッションの五部会を予定しておりますが、応募状況により調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもありますのでご了承ください。
◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募を歓迎します。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。
◎大会で発表を行う常勤職を持たない会員が宿泊費を必要とされる場合は、補助金１万円を支給いたします。
◎学会ホームページを随時ご覧ください。

以上